

六月十五日

「瀬戸際六人組」

窓際族は大企業の高齢者に在るだけではない。私の研究室の何分の一か、と言うよりもほぼ半数は「いつやめるの大学院」とそのかざれているのである。何もただただ居るだけの大学院では意味がない。なにかを一生ケン命にやってこそ大学に居る意味がある。

私は我ながら手抜きをしない教師だから、ハッキリしない大学院生にはハッキリ言う。「退学した方がイイヨ、早く」って。当初は皆眼をパチクリさせて驚いた。その驚き方を見て、ハハア、教師は皆学生に甘いのが普通なのを知った。

私は建築家だから、別に院生が一人も居なくたって構わない。十人も二十人も居たら迷惑なくらいだ。しかし普通は大学の教師は手持の学生数を誇るくらいがある。だから時に商店まがいに学生を呼び込んだりする。二流三流の屋台のオヤジみたいなものだ。私の学生だった頃はそんな教師が居た。私は腹の底からそんな教師を軽蔑していたから、大学院の研究室は一番人気の無かった建築史研究室を選んだ。それは正解だった。私はそこで田辺泰、渡辺保忠の二人の先生に出会った。学問の厳しさをさとされて、それで学問方面は止めて建築家になった。

そんな個人的な歴史を持つているから、私はクライアントにはおもねるけど、絶対に学生にはおもねない、チャホヤしない教師

になった。

それだから、私が言う「もう学校やめなさい、授業料払ってまで居る必要は何処にも無いよ」は正直な本音なのだ。

瀬戸際六人組はよくよくそれを知ってもらいたい。

一生ケン命になれないのも才能なのだから、そしてこんな事まで言われて危機感さえも持たぬのは、鈍感を通りこした、トンチンカン、ボーフラみたいなものなのだ。

それでも氣力を尽してラストチャンス頑張ってもらいたいとも思う。

六月十六日

川崎市の「星の子愛児園」入札が間近になった。極めて公共性の強い建築だから、様々な制度の制約があるが、基本的には施工の方法を変えることを試みたいと考えている。

開放系技術はつきつめて言えば、人間主体の環境を構築するための方法論だ。個人の住宅や私的な建築でそれを試みるのは容易だ。現に私の世田谷村はその事例の一号である。

公共建築にどのように適用可能かの戦略を考えているのだが、目前にその問題を解く鍵があるわけだ。「星の子愛児園」の施工の一部に開放系技術の体系を共存させる事を考えたい。施主にとつては良い建築を安価に入手できる事になるのだし、建設会社にとつても私の体系を取り入れることで、新しい形式を持つ競争力を得ることになるからだ。